イオム

アナキズム／文学と思想

ヨーロッパの旅・最終回
パリーロンドンーパリ　平山房子　1
詩　弱々しい暴力　高島洋　10

イオム雑記
唯一者ー辻潤と大杉栄に関する断章　大月健　12
飛びっちょということ　横倉辰次　14
働かざる者喰うべからず　前田幸長　15
ささやかな提案　宮崎晃　17

恨みと憐みをこめて
——ヒロヒト批判 1——　日野善太郎　22
アナキズムと盗奪企業爆破事件　大島英三郎　31

鍛冶屋・主義者・豆腐屋　第一回
吉田一氏のガムシャラ人生　萩原普太郎　34

N-ro 10　1976-1

■最新刊　■最新刊　■好評再版　■最新刊

真実の部落解放とはなにか。今日まで知られなかったアナキズム水平運動の真相の発掘。文献豊富。（宮崎晃著）A5 一九二頁 一、六〇〇円

差別とアナキズム
—水平社運動とアナ・ボル抗争史—

鮮人アナキスト朴烈、金子ふみ子夫妻は、デッチ上げの大逆事件で死刑宣告、ふみ子は栃木刑務所独房で自殺した。

金子ふみ子獄中手記（四六判増補 四六六頁）

何が私をこうさせたか
—埴谷雄高跋—
価 2,000円

アナキズム文芸思想誌（史的文献の最高峰）
昭和四年（創刊）「黒色戦線」全冊完全複刻
（昭和五年誌名を「黒旗」と変更）
価 五、〇〇〇円

アナキズム最高の理論紙の完全複刻版
「黒色青年」（黒色青年聯盟機関紙）（大正十五年より、昭和六年）
2,500円

群馬県伊勢崎市中町和田 〒372
黒色戦線社
振替 宇都宮 11015番

イオム　第10号　発行日＝1976年1月30日　発行者＝イオムの会／神戸市葺合区熊内町1丁目5－3　編集＝イオム編集委員会

¥250

ヨーロッパの旅（最終回）

パリ―ロンドン―パリ

平山房子

ル・モンド・リベルテールの店で

フランス最大の組織を誇る（？）フランス・アナキスト連盟（F・A・F）の事務所はパリ・十一区にある。通りに面した店先には連盟の機関紙〝ル・モンド・リベルテール〟を始めその分野の書籍、印刷物からレコード迄陳列されている。通りすがりの人達が一寸ウインドーの中をのぞいたりして、こじんまりしたブティクの様な雰囲気がある。我々が訪づれた時は、若い男女が店番をしていた。常に〝ル・モンド・リベルテール〟紙上にその名を飾って来たモーリス・ジョワイヨやモーリス・レザンといった老人達に代って、今では連盟の実質を担っているのは若者達になっているという。近来、日本でも人気が高まったシャンソン歌手のジョルジュ・ブラッサムはかってこゝの店番をやっていた。『今はもう彼氏、有名になりすぎてこゝには姿を見せないが』と我々を応待した若者は、ゆっくりとパイプをくゆらせながらそう云って笑った。小柄で美しい女性の方は、レコードを選んでいる私の話相手を根気よくつづけくれた。その親切にほだされて結局私はジョルジュ・ブラッサムとマルセル・ムルディの二枚の盤を買った。

グラシャとその仲間たち

その夜ホテルに帰ると電話のベルが鳴った。ベネズエラのヘルミナール・グラシャだった。イルデホンソから我々のアドレスを聞いたのだと弾んだ声が受話機を通し

て伝わって来た。偶然にもこのホテルの近くの知人の家に夫人と倶に滞在しているのだという。翌朝はやばやと彼の方から訪ねて来た。

〝ルタ〟というスペイン語のアナキズム誌をベネズエラで発行している彼はエール・フランスの職員でその特典を利用して世界中を飛廻っている。かって日本を訪づれた事もあり、彼の名は我々の間でもよく知られていた。私とは初対面であったが、私の書いたフランス語のパンフレット等を読んでいてくれて、なっかしげに話しかけてきた。私の同伴者のYとは旧知の間柄である。『君と日本で出会ってからもう十五年も経つ、僕はこの通り白髪もしわも増えたというのに、君はあの当時とらっとも変っていない。どうして年を取らないのだ。』と不思儀そうに云う。『いや、そんなことはない年を取った。』とYは照れ笑いする。思いかけないパリでの再会の喜びがよく分る。

マリ・ソル夫人にも紹介されて、夫妻の案内で我々はピカール街に近いアパルトマンにスペイン人のハナキ・ドラド夫人を訪ねて一同昼食のもてなしをうける。リベルトとホセという二人のスペイン人が加って食卓はにぎやかになった。この二人もドラド夫人も、ともにスペイン市民戦争の中をくぐりぬけて来た。リベルトはその時負傷した。ドラド夫人は七年間の牢暮しを強いられた。その生活が彼女の健康を奪ってしまったのだ。〝自由〟と誰もが口にする。だがこの人達からその言葉を聞くと重厚にして峻厳かつ哀愁さえはらんで胸に迫ってくる。すきのない身だしなみ、その端正で毅然としたドラド夫人の態度から彼女自身のきびしい生き方が感じられた。隣席で談笑しているマリ・ソル夫人の愛想のよさがドラド夫人のそういった輪郭を一層きわ立てていた。あまり笑顔も見せない夫人であったが、暇を乞う時、彼女は静かな口調で私に云った。『パリに来たときは何時でも立寄って下さいね。遠慮はいりません。』通り一辺の外交辞令ではなく心がこもっていた。建物を出て中庭から門に出る途中『あゝ夫人が見送ってくれている』というグラシャの声で振返るとベランダから手を振る夫人の姿があった。何か近づき難い人の様に思えていた私だったが、実際はやさしい人なのだと思って嬉しかった。メトロの駅でグラシャとも別れた。彼は翌年（一九七四年）夫人と娘を同伴して日本に来るというたのしい言葉を残して去っていった。

ソリダリテ・ウヴリエ

十八区のジャン・ロベール街にある〝アナルコ・サンジカリスト同盟〟の事務所は毎週火曜日の夜になると若い労働者達でにぎわう。教師、印刷工、等職業もいろいろだ。〝ソリダリテ・ウヴリエ〟がその機関紙で月刊二〇〇〇部出ている。私はこの機関紙は現在フランス国内で発行されているアナキズム系新聞の中では最も充実した内容と実際性を具えた新聞ではないかと思っている。記事を単なるニュース的なものに終らせず、常にその時点での彼等の行動がうかがわれて精気のある新聞を作っている。当時のブザンソンのリップ時計工場闘争は山場を迎えていたが、彼等は早くからリップの労働者支援を打出して、仲間をブザンソンに派遣したり資金カンパを募る等の活動をつづけていた。サンジカリズム運動の先駆者フェルナン・ペルーティエ（一八六七ー一九〇一、全国労働取引所連盟書記）の提唱した労働運動を高く評価していて、彼等のテキストにしている風であった。我々にもペルーティエを勉強する事をすすめて、モーリス・フーロン著〝フェルナン・ペルーティエ〟の一冊をプレゼントしてくれた。その夜集った全員のサイン入りだった。

パリの他、ボルドーとレームにもグループが存在している。〝ル・モンドリベルテール〟等の他のグループとも連絡はあるという事だったが、外国のグループや個人との接触はないと云った。しかし、その言葉を捉えて金髪の若い女性がすかさず『そんな事はない。現に日本とあるぢやないか』と物静かだがいたづらっぽくつぶやいて皆を笑わせる。公害問題で日本近海がすっかり汚染され〝今や日本では魚はポワソン（魚）ではなくポワゾン（毒）である〟と一寸ユーモアを交え乍ら私が話すと『君のいう通りだ』と一同共鳴する『しかし、フランスでは、日本から大量の魚を輸入しているという話だ。一体どうなっているのだろう』と皆不思儀がる。メトロの終電車の時間を気にし乍ら我々は話し興じた。

書籍を買いに行ったC・N・Tスペインの事務所では、マルセーユ大会で顔みしりになった老人達と再会した。隣り合せに事務所を構えている〝フロン・リベルテール〟の部屋をのぞくとそこには若い学生達でにぎわっていた。ガンベッタ通りのエスペラント本部を訪問したり名所史蹟めぐりに動き回っている間に八月も終ろうとしていた。

ロンドン旅行

我々は思い立った様にイギリスにむけて出発した。北駅を夜の十時に出ると夜中すぎにダンケルクに着いた。こゝで列車を降りてフェリーに移る。その間に税関を通る。モタモタして船にたどりつくと、船中は満員の乗客

で横になる場所もない。汽車の一等客は船に移るとベットがある。二等切符で来た客には四十ペンスの追加料金を払えと云う。バーやカフェは飲み物をとり乍ら、そこでまどろんで夜を明かすらしい乗客にすっかり占領されてしまって入る余地は全くない。我々はいたづらに船内をウロウロしただけで、どこからもはじき出されてしまった。今更追加料金を払ってベットに行くものかと妙に私は意固地になった。我々と同じ様に要領の悪かった連中が廊下や階段などに坐りこんでいる、我々もその仲間入りをしてバーの入口近くの床に腰を下した。寒気が襲って来て到底眠れそうもなかった。すぐ目の前で制服をスマートに着こなした乗組員達が立話しに余念がない。一般乗客の事などまるで眼中にもない様に思えて苦々しかったが、その彼等の物腰が優雅で洗練されているだけによけいしゃくにさわった。それでも朝もやの中からドーヴァの白い涯が現われたときは嬉しかった。未だ見ぬ土地への期待感に胸はふくらんだ。だが上陸するのにずい分手間どった。船中で税関検査があったからだ。背広姿の数人の役人が旅行者の一人一人と面接して上陸許可をあたえるというわづらわしさである。滞在日数、入国目的、出国後の行先き、本国に帰るための航空券の所持の有無、等パスポートを念入りに眺め乍らの質問だ。ドーバー海峡の寒風と徹夜の疲労でいいかげんなりしているところえこの慰愁不礼な税関の出迎えだ。私はすっかり気分を悪くした。イギリスの税関がヨーロッパの他の国に比べて厳しいという事はよく聞いていた。だからこの入国検査が例外的に不愉快だったという訳のものではなかった筈だ。

そもそもイギリスの税関に対する私の悪感情は一九七〇年の時に起因する。東京からロンドン経由の日本航空でパリ迄飛んだ。ロンドンのヒースロー空港に立寄った時、そこの税関は乗客の持物は勿論、男性に対してはコートの下に両手を入れて躰中をさぐる念の入れ様であった。さすがに女性の体には手をかけなかったがハンドバックは底からかき廻された。その便は個人旅行者ばかりで乗客数も少なかった理由もあったかもしれないが、わづか一時間程の待時間に二度迄それをくり返されたので、さすがに大人しかった乗客の中からも『二度目ちやないか』と批難の声をあげる者も出て、ようやく身体検査は打切られたが、二回もバックをかき廻された私は甚だ不満であった。それも滞在国として入国したフランスの税関があまりにも愛想よく迎えてくれた事で、イギリスに対する私のうらみは募ったという訳だ。その時から私はどうもイギリス嫌いになったらしい。

フリーダム・プレス

ともかく、ドーバーから列車でロンドンのビクトリア駅に着いたのは十時頃だった。メトロに乗ってホワイトチャペル迄行き〝フリーダム社〟を訪ねる。左程入り組んだ街並でもないのに容易に見つからない。同じ道を何度も行き来して通行人に尋ね乍ら、やうやう探しあてた〝フリーダム社〟は閉っている。表で三十分も待っていると店番だという小柄なおばあちゃんが現われて、やっと中に入れた。書籍を購入するのに三、四十分もかかったであろうか、本だけでなくプロパガンダ用のバッチも売っている。〝合衆国は北アメリカから出てゆけ〟とか〝アナーキー〟の文字が入った赤や黒のバッチである。シャトー・ジュ・ロワール大会に参加していたアメリカ青年達の胸についていたので見覚えがあった。気紛れに三つばかり取り上げるとおばあちゃんが紙袋え入れてくれ乍ら『こんな物を持って帰ったら日本の税関が入れてくれないんぢやないか』と冗談をいう、巧みなフランス語だ。『それぢや私がよく説明しますよ』とこちらもやり返すと『何ていって説明する？』と言ってゲラゲラ笑う。〝フリーダム〟はフランスの〝ル・モンド・リベルテール〟等と同じ様に出版物の販売をするだけだという陰口も聞えてくる。しかし、それ自体意義ある仕事だと私は評価する。陽気で元気なおばあちゃんに別れを告げてそこを出る。

C I・R・A（ローザンヌ）のマリー・クリスティーヌからロンドンを訪ねたときはニコラス・ウオルタ（ロンドンタイムズの寄稿者）に会うことを勧められていた。ウオルタには我々の事を手紙で知らせておくとマリーは言っていたが訪問の予定日を言わなかったから、果してうまく会えるだろうかと思い乍ら電話をかけたが通じない。連絡は後刻にまわして市内観光に出かける。ロンドンタワー、ピカデリー広場、トラファルガースクェア、等実際に観るのは始めてだがもうすっかり写真でおなじみの場所ばかり。我が若き日の涙をしぼった思い出の映画〝哀愁〟の舞台になったウオータールー橋は、すっかり新しい橋に生れかわっていてがっかりさせる。しかし笑顔を作ってパチリとお上りさんよろしく記念撮影をします。バッキンガム宮殿の近くでは高級車から降りる正装姿の男女達を見かけた、夜会にでもいくのだろうか夕方の薄明りの中をイヴニング姿で通りすぎていった女性達の揃って青白く生気のない顔色が妙に印象的だった。

再びビクトリア駅にたどり着いた時、私はひたすらパリに帰りたいと願っていた。レストランでアルコール類

を出す事を禁じられているロンドンでは、食べる楽しみも味わえなかった。そして何よりも陽光の少いこの街の陰鬱さが、ホテルを探す気持を私に起させなかった。ニコラス・ウオルタとの連絡がつかない事を気にし乍ら同伴者達に意見を聞くと、私と同じ様に〝今夜の中に出発しよう〟という。私は嬉しくなって急に元気が出て来るのを感じた。

パリに戻るとロンドン旅行はどうだったと人々から尋ねられて『あそこはあまり好きぢやない』と云うと『どうして？　ロンドンは美しい街なのに……』と大ていは意外そうな顔をされた。実際は彼等の云う通りなのだろう！　考えて見れば街で接した人々は皆親切で好意的だった。観光客であふれている表通りばかりを歩いていて、その土地のほんとうのよさなど分る筈もない。旅行を充分楽しめなかったのは大いに私の偏見のせいでもある様だった。

パリ－旅の終り

九月に入るとパリの街は急速に秋の気配になっていく。めっきり少くなった観光客に代ってシックな秋の粧いのパリジェンヌの姿が目につく様になる。そして我々も観光客だ。パリを去る日が近づいて来た。何とも名残り惜しい気持で一杯だ。エッフエル塔から市街を眺めたり遊覧船でセーヌを下ったり、飽く事なく貧欲にパリを我が胸の中におさめておきたかった。ホテルに帰っても、そのまゝ眠ってしまうのがもったいなくて大通りのカフエに出かけてはワイングラスを前に更けて行くパリの夜のたゝずまいを満喫するのだった。

十四区の我々のいたホテルの界隈は住みよい庶民のまちだった。ジェネラル・ルクレルクの大通りの両側には、小粋な酒落た商店が軒をつらね、映画館もあれば郵便局もある。道往く人々の服装もこざっぱりしている。労働者街の様な騒々しさもないが、取りつきにくい様な気取もない。大通りを入ればにぎやかな朝市も立つ。

カフエテラスから街の風景を眺めていると楽しい。パリに居るという実感が強く感じられるのもそんな時だ。道端で立働いている労働者ののんびりした仕事ぶりを観察するのも一興である。全員が一斉に働く光景なんて見られない。一人が仕事をしていたら大ていその周りで三、四人はガヤガヤ云って遊んでいる。板囲いをした工事現場の中で二人の労働者が作業をしていた。こちらから見ていると仕事をするためにしやがむと丁度板囲いの中に上半身がかくれてしまう。二人で何やら喋り合っている事はあっても、その姿がそろって消える事はない。必ず

一方が手を休めていて、こちらからは姿の見えない相棒の方に話しかけているか、往来をきよろきよろ眺めたりしている。交代で休憩をしているのかと思っているとさうでもない。同じ状態が長続きしない。すぐに動いていた男の顔が現われる。二人揃って話していると思うと今度は手を休めていた方の姿が消えている。板囲い越しに二人の男が交互に出たりひっこんだりするから側から見ていると実にユーモラスで笑いを誘われる。当人達は結構それで働いている積りかも知れないが、これでは一体工事は何時終るやらと心細くなる。しかしその呆気で陽気は仕事振りも彼等がアルジェリアやチュニジア、或いはイタリア等からやって来た南方系の出かせぎ労働者によって占められているということから頷けよう。フランスの今日の繁栄を支えているのは彼等の労働力によるものであるとさえ云われている。かって私はボーラトン夫妻と車でフランス各地を旅行した事があるが、どの地方を走っても道端で立働いていたのは、殆んど一目でそれと判る出かせぎ労働者達だった。その傍で彼等を監督しているのがフランス人であるという光景に何度も出くわしたものだ。その時、私の横で車のハンドルを握ってバカンスを楽しみつゝあるフランス人ボーラトンが労働貴族であることの感を深くしたものであった。

別れの前夜

そのボーラトン夫妻が五十日ぶりにパリに出てきた。我々の出発を見送るためである。明日、我々はパリを離れるだろう。最後の夜をボーラトン夫妻と倶にモンマルトルの丘に立った。ネオンの明滅の中に黒々と広がるパリがあった。我々はそれぞれの想いを抱いてそれを見下していた。旅情に浸り乍らの優雅な夜のプロムナードと傍目には映ったであろう。しかしその時の私はそんな気分を満喫するどころではなかった。胃のあたりから絶えまなくせり上って来るむかつきをこらえるのに懸命だったのだ。その兆候は正午にモンパルナス駅に夫妻を出迎えた頃から始まっていた。我々が感謝の意味をこめて夫妻を日本料理に招待した昼食の時にもあまり食欲はなかった。前日のレストランでの夕食の喰べすぎが原因だと気づいたが時間が経つ程益々むかつきは烈しくなっていた。私は記念すべき貴重なその夜の思い出が、私一人の為に台無しになる事を何よりも恐れた。出来るだけ何気なく振舞う事に努めたが遂には額に油汗のにじんでくるのが感じられるのだった。

モンマルトル界隈の夜は華やかだ。客を待つ夜の姫君達のあで姿、ストリップや怪し気な見世物小屋の呼びこ

みのにぎやかな声、日本人観光客の紳士方は、こんな場所が大そうお好きと見えて日本人と見るとカモにされる。我々がそんな小屋の前を通りかゝると、とたんに呼びこみのにいちゃんの声がかゝってくる『ドーゾ、ドーゾ、ヤマモトサン!!』勿論私に対してではないので気にもとめず通りすぎ様とする。Tが腕をとられている、相手は脈ありと見たのか営業用に覚えた下手な日本語のありったけをこゝぞと披露して彼の気を引く。茶目気たっぷりのTは、さんざんしゃべらせてからポカンとした顔付きで『私は日本語が分りません。それに私は〝ヤマモトサン〟ではありません』とフランス語で応答して一瞬、度胆を抜かれた表情の相手を後にゆうゆうとその場を離れる。尤もフランス人の友人と連れ立っている場合はどこからも声はかゝらない。

我々は石畳みをゆっくりと上っていった。昔の紛ひき小屋も残っていた。ベル・エポックを偶ばせる情緒ゆたかなシャンソンが流れる路地も歩いた。サクレクール寺院の建つ丘の上にたどりついた時、それは長い長い時間であった様に感じられた。夜は更けて名残りはつきないが、もう丘を降りなければならぬ、我々は歩き始めた。その時だ。もう堪え切れなかった。人目に触れない植込の中に私はかけ込んでいた。どれ程吐いたのかよく見えなかった。背後からTが素早くちり紙で汚物を覆いかくしてくれた。めじりに涙がにじんで胸のあたりがすーっと軽くなっていくのを感じた。こうして私はモンマルトルの丘に置土産を残してきたのである。

オルリーへ

翌朝目がさめると気分は落着いていた。だが昨日から食べていないので体力がなくて元気が出ない。ボーラトン夫妻は我々のホテルの一室に泊っていた。その部屋をのぞきにいくとベルギーのギイ・バドウがいた。ブルッセルからの夜行で早朝パリに着いたというのだ。我々を見送るために遠路はるばる旅して来た彼にありがたいやら申訳けないやらの気持であったが、いつも豪放であまり相手の気持にこだわらない彼の出現で私は空港での別離の悲哀から逃れられるのを直感した。彼は私の顔を見るなり左右の人差し指を両眼の目尻りに持ってゆき『おゝ/フサコ/ウエエン…』と大仰に涙のこぼれる形容をして見せて笑わせる。

『又、パリにいらっしゃい』というホテルのマダムの笑顔に送られてボーラトン夫妻とバドーを交えての我々一行はオルリーへの道をとった。見慣れた沿道の景色が車窓の後へ飛びさかっていくのを目で追い乍ら、私も時

を逆に廻したい想いにかられた。単なる暑さ負けや食べすぎにしてはあまりにも長い時間の継続だった昨日の私の軀の変調はきっと〝パリを離れる事への拒否反応〟だったのだと私は思った。

オルリー空港ではロベール・ダリアンが我々を待っていた。彼はこの空港で働いていた。にぎやかな見おくり陣になった。ダリアンもバドウも別離の雰囲気を楽しんでいるかの様に陽気であった。出発前のあわただしい時間を我々は白ワインで乾杯した。

〝さようなら/ 又会う日まで!!〟

一九七三年九月八日、その快晴の空に我々の飛行機は飛立った。

『コンミューン今再び』改題

而シテ 第四号

〔目次〕
オウィディウス・ノート (1) 木村 健治
虚無思想雑誌探訪 (1) 大月 健
同世代狂世論 (2) 稲本 恭啓
詩・春歌考 (1) 樋口 武二
雨情野原 土岡 忍
小説・伝説の三輪山コンミューン (4) 浅茅原竹昆古

〔発行所〕泊地社・京都市右京区太秦西野18－8 (土岡方)
年間購読料（送料共）一二〇〇円・本号三〇〇円

3号 (定価二五〇円)

〔目次〕
第二維新論 (3) 松本 健一
更科源蔵論 大月 健
同世代狂世論 (1) 稲本 恭啓
詩・鮮麗 和田 誠造
創作・類 土岡 忍
〃 伝説の三輪山コンミューン (3) 浅茅原竹昆古

弱々しい暴力

高島　洋

とうとう癇癪玉を破裂させてしまった
やい　やい　やい
おとなしく待ってりや　いゝ気になりやがって
いつになったら起重機をこっちへよこすんだ
この唐変木め
作業服のそでを肩先にまくりあげ
いつの間にか右手にバールをつかんでおれは怒鳴っていた
まわりで作業中の仲間たちが
あわててあつまってくると
口々になだめながら
おれのまえに立ちふさがった
おれの権幕におどろいた相手は
一しゅん　たじろぐと
青ざめたままだ
おれは相手のひるむ様子につけ入って
ますますいきり立つ
威猛高に　追い打の啖呵をきろうとした
その時
ふと作業場のすみの方で
にやにやわらっているBの眼を見てしまったのだ
おれははっとした

つい二、三日前
コップ酒をひっかけながら
Bは　おれにあびせるように言った
お前はじぶんで強いとおもっているのか
えらい連中には尻尾をまいてるくせに
仲間ばかり相手にしやがって
それで強いとおもってるのかよ
職場の要求の交渉で
えらい連中を相手に
腰をすえて　一歩もゆずらぬBの態度をおもった
おれはもう一度そっとBを見た
Bの眼は相変らずにやにやわらっていた
〝しまった〟
おれはしょんぼり肩をおとすと
いつのまにか　もっていたバールをこつんと土間におと
していた
やがて　すごすごじぶんの持場にかえっていった